登場人物の立場で「四面楚歌」を語る　～生徒作品～

◆項王、「四面楚歌」を語る

俺の軍は垓下にとりでを作って立てこもっていた。兵士は多く死に、減って、食糧も底をついた。漢軍と諸侯の兵は、俺の陣を何重にも囲っていた。

夜、驚いたことに、四方から俺の故郷である楚の歌を歌っているのを聞いて、かなり驚いた……。そして、言ったんだ。

「漢はもう楚を得たのか。外の敵に楚の人間のなんと多いことだろう。」

俺は、そこで最期だと思い、起きて本陣に行き、別れの宴会を開いた。そこには、俺の愛する虞美人と、常に乗っていた駿馬の騅がいた。この窮地の中、俺は自作の歌を、怒り嘆いて歌ったんだ。

「俺の力は山をも引き抜く。俺の気力は天下を覆い尽くす。だが、時勢は不利だ。愛馬の騅も進んでくれない。愛する虞よ、今の俺では、お前をどうしてやることもできないんだ。」と。

これを俺は数回繰り返して歌った。すると、虞もこれに合わせて歌ったんだ。俺はそれを聞いて泣いた。俺の周りの臣下たちも皆泣き、顔をあげて俺を見る奴はいなかった……。

◆虞、「四面楚歌」を語る

項王様の軍が垓下に壁を作って立てこもりました。兵はすっかり少なくなってしまい、食事もままならない状況のようでした。漢軍や諸侯の兵たちは私たちを何重にも取り囲んでいます。

夜に漢軍が四方で楚の歌を歌うのを聞いて、項王様が驚いて、

「漢はもうすでに楚を手に入れてしまったのか。何ということだ。」

と言ったそうです。項王様は、夜中、私と項王様の駿馬である騅のいる陣中に入って来られました。そして、悲しげな様子で激しく心を高ぶらせて、ご自分で詩を作って歌われました。

「私の力は大地から山をも引き抜き、気力は世をおおい尽くすほどである。しかし時勢は私に不利で、騅も進もうとしない。騅が進もうとしないのを、どうすることができようか。虞よ、虞よ、お前をどうしようか」

数回項王様がうたわれた後、私は項王様と歌いました。すると項王様は涙しました。周囲の臣下も私も皆泣き、項王様を見ることができませんでした。

◆左右の臣下、「四面楚歌」を語る

項王様と私たちは垓下に立てこもった。味方は減って食べ物も底を尽いた。漢軍や諸侯の兵が私たちを何重にも取り囲んだ。夜になって漢軍の兵士たちがその地方の歌を歌うのを聞いて、項王様はとても驚かれて、「漢軍は皆すでに楚を手に入れてしまったのか。これは何と楚の国の人が多いことか。」とおっしゃった。私たちもとても驚いた。私たちは夜、項王様が開かれた宴会で一緒にお酒を飲んだ。もう最後かなぁ、と気分が沈んだ。虞という名前のとても美しい項王様のお気に入りの女官がいた。虞さんはいつも項王様に愛されて項王様のそばにいらっしゃった。それと、とても足の速い騅という馬がいた。項王様はいつもこの馬に乗られていた。そこで項王様が悲しげに歌われ、激しく心を高ぶらせて詩を作られて「力山を抜き気世を蓋う　時利あらず騅逝かず　騅の逝かざる奈何すべき　虞や虞や若を奈何せん」と数回歌われた。何と、覇王である、あの項王様が涙を幾筋も流されたのだ。私たちは胸がいっぱいに苦しくなり、泣いた。顔をあげて項王様を見ることができなかった。

◆**楚の兵士**、「四面楚歌」を語る

私は項王と一緒に垓下に立てこもっている。兵も少なく、食料も底をつきそうだ。警備をしていると、壁の外が漢軍や諸侯の兵に何重にも囲まれているのが見えた。夜になると、壁の外から楚歌が聞こえてきた。

「ああ……、楚の国の歌だあ……。なつかしいな、帰りたいな……。」とさみしくなった。しばらくすると、項王と臣下たちは酒宴を始めていた。そこで項王の悲しげな歌が聞こえてきた。

「ああ……、もう私たちには勝ち目がないんだ。あっちに行けば助かるかもしれない！」

私はこっそり垓下の外へ逃げ出した。

◆**楚の兵士**、「四面楚歌」を語る

Q1，垓下にいたとき、歌が聞こえてきてどんな気持ちでした？

A1，僕は、故郷の歌が聞こえて、生きて故郷に帰りたいと思ったんです。

Q2，本陣で宴が始まったことを聞いてどう思いましたか？

A2，ついに項王は敗北を覚悟したなと。

Q3，なぜ寝返ったのですか？

A3，（兵1）負けるぐらいなら戦いはしたくない。

（兵2）故郷に家族がいるから。

（兵3）こんなところで死にたくない。

（兵4）項王が嫌いだった。

◆**漢の兵士**、「四面楚歌」を語る

ついに楚を追いつめた。長い戦いだったが、楚はもう食糧も尽いているはずである。敵に包囲され、項王には懸賞金がかけられ、この状況で寝返ってくる兵は少なくないだろう。楚の歌を歌えば、一気にこちら側のものだ。予想した通り、多くの兵が出てきた。今まで信じてきた兵たちに裏切られた項王はどんな気持ちだろう。逆に、今までつかえていた項王を裏切って出てくる兵たちはどんな気持ちだろう。どちらにせよ、もう項王に後はない。中から嘆く声が聞こえてきた。おそらく最期の酒でも飲んでいるのだろう。多少手荒なことをした。項王を倒したら手厚く弔ってやろう。